



特別美人ってわけでもないけれど、プスってほどじゃないし、性格だってまあ良い方だと思っのに、どういふ訳か男にもてない！と嘆いている女の口。あるいは逆に、一度デートしたつきり、彼女が二度と誘いに応じてくれない！と悩んでいる男の口。そういう女の口や男の口たちから相談を受けた時、私は簡潔明瞭なアドバイスをすることにしている。会話の中で、「私」ではなく、「あなた」という言葉をたくさん使いたさい」と。これは一組の男と女の間に恋のムードを生むために、かなり有効な対策である。

男も女も若い時というのは、なぜか自分のことばかり喋りたがる。「私ってね」「私が幼かった頃」「私の夢は」「僕ってさ」「僕の車は」「僕の家では」などなど、やたらめったら一人称だらけの会話なのである。

私は一人称を連発する男を、心から軽蔑しているし、ルックスが飛び抜けて良かったとしても一時間も一緒にいたくない、と思っっている。そういう男たちは大抵かなり自己愛が強くて、「自分が愛されたい」から恋愛をする、というケースが多いのだ。こういう男を恋人にしてみました、まったくどれほど大変だろう？！

だいち、せつかく生まれかけている恋のムードを、「僕」や「私」という言葉は簡単にぶち壊してしまう。一人称の多い会話は、確実に相手を白けさせてしまうのだ。まあ、本人にしてみれば、「私（あるいは僕）」のことを解かってほしい」と思っっているにお喋りをするのだからうけれど、それ以上に「相手のことを知りたい」という気持ちが生まれる方が自然だと思っののだけかどうか？

だから、この「私」あるいは「僕」という単語を、「あなた」に変えてもらいなさ

い。そうしたら、どれほど会話は甘い恋のムードを生むことだろう。

「あなたは、どんな音楽が好きなの？」というセンテンスは、「僕はさ、レゲエが好きなんだ」というセリフよりも、「あなたは黒が似合いますね」というセンテンスは、「私って、黒が好きなの」というセリフよりも、それぞれ素敵な空気を作ることができるものである。

ところが残念なことに、こういう会話のできる男はほとんどいない。どれほど少ないかというと、私の人生において、最初の会話から「あなた」を連発してきた男がたった一人しかない、というほど希少価値なのである。彼は私よりも7つも年下で、ルックスだけでも充分に女たちを魅了してしまえるような男だった。事実私は彼を眺めているだけで、心がひりひりと痛むような感覚に襲われたものだ。

そして彼は最初から、ほとんど自分のことを喋らずに、私のことばかり訊きたがった。ところが、私はいくらも、彼のことを知りたいため、だから答える。「私のことはもう良いから、あなたのことを教えてちょうだい」。ところが彼は自分のことはほとんど言わない。まったくのミステリアス。そしてますます私は彼のことを知りたくなるのだ。そこで私は、彼がどういふ男なのか知るために、さまざまな質問を投げかけた。けれども彼は

「自分のことは、よく解からないんです」というセリフで誤魔化すか、くすくすと笑って何も答えないかのどちらかで、私はまったく彼がどういふ男なのかさっぱり理解できずに翻弄され続けた。

私よりも遙かに若く、ルックスだけでも女たちの溜め息を誘うような男が、そんな会話をやってのけることができるという一方で、もうすっかり大人と呼ばれる男たちの中にも、自分のことばかり喋りたがる一人称愛の家も多いという事実。

どちらの男が魅力的で、女たちにもてるかということはもう明確である。ルックスがそれほど悪くもない、性格だって良い方だと思っ、けれど、異性にもてないと思っているあなた、原因は会話。会話でつまづいているのだ。

自分を執拗にアピールしたがる人は、相手を退屈させているのだということ。逆に、自分の好奇心を刺激するのだということ。結局、相手のことを知りたがるという姿勢や質問の数々は甘い恋のムードを生むことができるのだということ、それぞれお忘れなく。素敵な会話から恋を生むことができる男や女なんて、そうめったにいるもんじゃやない。それだけに、とびきり魅力的に映るものなのである。

マンボカー パラダイス オートキャンプ へ行こう

ハマッテしまいました。誘われても、残念！明日はお仕事！とかなんとか言っつてめんどくさがって一度も行ったことがなかったオートキャンプへ行っつて参りました。この前に行っつたお花見のあと、三十九度の熱が一週間も下がらなかった私は行く前に「今

プロフィール 1965年生まれ。同志社女子大学卒。(株)電通プロダクション勤務を経て、現在コピーライター。広告のほかFMラジオ番組のシナリオや出演もこなす。著書に「ありふれた無邪気が罪になる」(PHP研究所)、「キスマで、待てない」(大和書房)など。

MARUOKA IZUHO

